児童の作品

えんぴつけずりのしゅうり

高取小四年 原口祥子

電気えんぴつけずりでクーピーをといでいました。

こげ茶色のクーピーもだいぶ使って先が丸くなっていたので、といでみようとえんぴつけずりにいれ「そろそろけずれたかな」と思ってクーピーをとろうとしたら、ぬけなくなりました。

だんだんあせが出てきて手がぬるっとしてきました。思いきりひっぱったら、ポキンとおれてしまったのです。

あなからのこったのをだそうとしましたが、どうしてもとれなくなってしまいました。

お母さんから、クーピーはといだらもったいないといわれていたので、おこられると思ってこのことはいいませんでした。

つぎの日、学校から帰ってさっそくえんぴつけずりのしゅうりにとりかかり、くぎでこなごなにしました。でもすぐにゆび先に力が入ってじんじんしてきました。

「やっぱりお父さんにおうかな」と思いました。そしてつくえのえんぴつ立てを見たら、へんな形のとがった糸きりがあったので「これをつかってみよう」と思い、あなをごにょごにょとかきまわしました。何十分もつづけたので、あせが出てきました。まだクーピーがつまっているようです。もうあきらめようかと思いました。だけどお父さんが物を大切にしているので、自分も大切にしようと思い、ためしにえんぴつを入れてみたら、ゴーゴーとえんぴつのけずれる音がしました。

「やった」とうれしくなりました。最後までがんばってよかったと思いました。

「おんぼろヨットのぼうけん」を読んで

緑ヶ丘小五年 村中香奈郁

私は「おんぼろヨットのぼうけん」を読んで、すこしふしぎに思いました。

それは、熊田太郎という人はニューギニアまで行くのにこわくなかったのだろうかということです。お父さんにとめられてもふしぎではありません。

とてもおどろいたことは、有尾人間のことです。

それをしらべにニューギニアまで行くからって、家の物をうってしまって、百八十六万五千三百二十八円あったそうですが、よくできたものです。

あやしかったアメリカ人も、結きょくうらぎりものだった。

それがわかったガンさんは、びんかんだと思いました。

海ぞく船まで出て来て、じゅうをうってしずめてしまうのも少しスリルがありました。

こわかった所はガイ骨の家でした。

太郎がこわがっている間、ゴロさんがブタにまちがわれてると言うのは、すこしだけふき出しました。

日本語もパァプ語になればいいと思いました。

カヨナの意味は、

「こんにちは」

「ありがとう」

「すばらしい」

「おめでとう」です。

大ぼうけんはとてもすてきです。

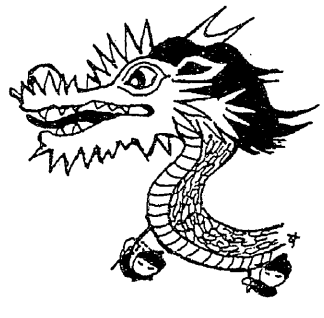
私も一度でいいからぼうけんをしてみたいです。

エトの話 たつ・辰・竜

今年のエトは辰（たつ）。十二支の五番目。方角では東南東に当たり、辰の刻（こく）とは午前八時のこと。そして動物では、竜とされています。

竜はもちろん、十二支の中でただ一種類だけ入っている想像上の動物です。世界各地に竜のイメージはありますが、日本ではヘビの胴に、シカの角をはやし鬼の目、牛の耳を持った頭がつき、四本の足とウロコのある大形は虫類として描かれます。

西洋には悪竜が多いようですが、日本ではむしろめでたい存在。水を管理する水神、海神として、うやまわれています。



竜の住まいが竜宮。浦島太郎が連れていかれた竜宮城は海の底ですが、海の他にも川や井戸の中、木のほら、雪山のふもとなどから竜宮城に行けるという伝説が日本各地にあります。

イギリスのネス湖のネッシーが有名ですが、日本の竜の住まいを発見したら、世界的な話題になるでしょう。

三池炭鉱社宅の変遷

あとがき

第十九回

武松輝男

三池炭鉱の社宅について、三月十六日号の第一回「まえがき」にはじまった連載も、今号で第十九回を数えるまでになった。『みいけ』が月二回刊であるから、九カ月にわたって書き綴ったことになる。

この間、めずらしく、またなつかしい社宅にもめぐりあった。

その一つが、谷後社宅であった。宮原黒橋の南側にあったもので、たぶん宮原充塡、黒橋の西側のすぐ左手に事務所があった。その関係の人々が最初に住んだのではないか、と思っている。ちなみに宮原黒橋の東側に、いま三井東圧化学のアパートが建っているが、もともとここは宮原採土所があったところである。

珍しい名前のもう一つは、勝立北海道と大谷北海道という呼び名でとおっていた社宅である。勝立北海道というのは勝立東谷社宅のことである。大谷北海道というのは高取小学校の西側にあった「露頭坑」＝露天堀ではない＝に勤める労働者が住んでいた大谷社宅のことで、市街地から遠くかけはなれている、ということでつけられた俗称のようである。この大谷北海道に朝鮮人社宅があったことは、あまり知られていない。

ところで、十一月一日号（第十六回）に、熊本日日と読売の両新聞が、三池炭鉱の社宅計画を報じたことを記した。両新聞は記事の中で、大牟田・荒尾に散在する社宅は六十八カ所と述べている。しかし、どう考えても六十八カ所とは少なすぎる。二十カ所か二十二カ所は少ない。

自分たちが住んでいる場所で、社宅のありかをみてみるともっとはっきりしてくる。両新聞の記事も、三池炭鉱社宅計画に述べられている数字をそのまま報じたものであろうが、その計画に述べられていない二十カ所か二十二カ所の社宅はどうなるのだろう。社宅計画には、残すものも廃止するものも併せて書き述べられているはずなのに。

社宅計画を別の面からみてみることにする。

三池炭鉱の社宅とは、実に不思議なところである。社水と市水が混在している。

社水、正式には炭鉱石炭採掘に伴って発生する地下水枯渇に対する補償給水のことである。この社水給水を受けている社宅戸数は、四千九百五十四戸。

市水、大牟田市水道局給水の上水道。この給水を受けている社宅が千八百四十三戸。

この二つの給水系統で、社水給水戸数のうち二千六百四十九戸が撤去か撤去予定。市水給水戸数のうち五百七十四戸が撤去か撤去予定である。

この社水給水戸数の撤去が多いのは、主に集団社宅をかかえているからだろう。が、これは、いま三井物産が計画しているアジアランドへ向けての布石だろう、という識者もいる。

社宅というのは、その社宅を管理する企業の生産計画にともなって変動するといっていい。あるいはそれは当然のことかも知れない。

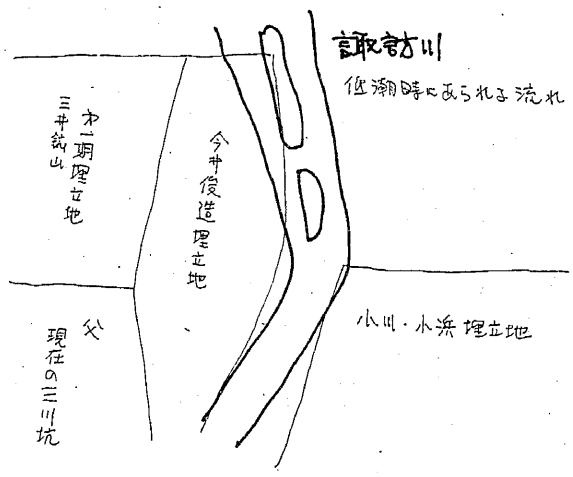
だからこそ、社宅をめぐっての労働者の心は波立つ。移るならいい社宅へと希う。これも生活する者にとっては当然のことである。

この管理と希望、この二つの間（はざま）に白波が立つ。恩恵と貢献とが相克する。

三池炭鉱では、明治二十二年以前も以後も、恩恵と貢献とが相克してきた。そこに三池炭鉱のたくみな社宅労務管理が睥睨（へいげい）していることを忘れてはならない。

（カットも筆者）

明治43年頃の三川鉱附近

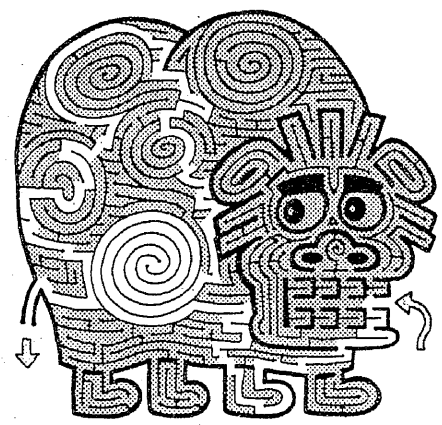


「クロスワード」解答

タ	コ	■	カ	メ	レ	オ	ン	■
■	メ	イ	ク	イ	ー	ン	■	エ
カ	ビ	■	ヘ	■	ス	ラ	ン	プ
サ	ツ	エ	イ	キ	■	イ	■	ロ
イ	■	ド	キ	■	カ	ン	ト	ン
■	ミ	■	ハ	タ	ケ	■	ケ	■
ハ	ン	タ	イ	■	ス	パ	イ	ク
タ	イ	■	ゼ	イ	■	イ	ダ	イ
チ	■	タ	ツ	ド	シ	■	イ	ケ

答 カクヘイキハイゼツ

「ししまい迷路」解答



〈詰将棋解答〉

初級クラス

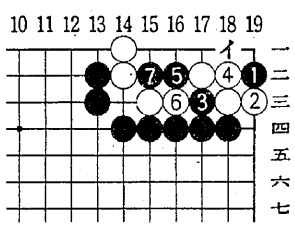
▲2一銀△1三玉▲3三竜△同竜▲1四金まで5手詰。

解説 平凡に▲2一銀で△1三玉と追い、次の▲3三竜が好手。△2三合なら▲1二金がある。なお、3手目に▲1四金は△同竜以下、王手はつづくが届かない。

中級クラス

▲1二歩△同玉▲1三銀△2一玉▲1一飛△3二玉▲3三金△同玉▲3一飛成△3二合▲2四銀成まで11手詰。

解説 3手目▲1三銀が好手で、△同玉なら、▲1一飛から▲2四金がある。つづいて7手目の▲3三金がとどめの一手で、△同玉に▲3一飛成から▲2四銀成がピッタリ。

〈詰碁解答〉

黒1の置きから3が好手順。白4に黒5、7で白は全滅です。黒1ですぐに3は白1黒イ白5で全部は殺せません。また黒3で5は白6黒3白7で失敗です。